瀬戸内晴美作品集〇4〇

美は乱調にあり 他

筑摩書房

瀬戸内晴美作品集　第四巻
昭和四十七年五月十五日　第一刷発行
昭和四十七年六月十五日　第二刷発行

著者　瀬戸内晴美
発行者　井上達三
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話　東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三
郵便番号　一〇一―九一
印刷　明和印刷・製本　矢嶋製本
装幀　中島かほる

(分類) 1393 (製品) 72604 (出版社) 4604

目次

美は乱調にあり　三
鬼の栖　一九一
解説　松原新一　三五

美は乱調にあり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

美はただ乱調にある。諧調は偽りである。

大杉　栄

博多行を思いたった時、私はただ、美しい生の松原のあるという今宿の海岸に立ってみたいというだけの軽い望みを抱いていたにすぎない。

地図でみると博多湾に面した今宿の町は、福岡市の西の外れで、博多の中心街からは三里ばかりも離れているように見えた。博多湾の中に更に今津湾という入江があり、その海岸線の丁度中心に今宿はある。

博多から唐津への街道筋に面したその町を、私は四、五年前の旅の途上、車で走りすぎた筈であったが、何の記憶ものこっていなかった。かつては、福岡県糸島郡今宿村と呼ばれていたその小さな海辺の町の名を、私が意識しだしたのは、伊藤野枝の俤が、私の胸に棲みはじめて以来のことであった。

伊藤野枝といっても、昭和生れの人たちにはおそらく何の記憶もなく、大正生れの人たちにさえ、ほとんど知られていない女の名前だろう。ただ、少しでも大正時代に興味と知識のある人なら、あの時代の前期と後期に起った二つの大事件、幸徳秋水の大逆事件と、大杉栄虐殺事件を知らない筈はない。大正十二年九月一日におこった関東大震災後のどさくさにまぎれて行われた、様々な虐殺事件の中でも、憲兵大尉甘粕正彦と部下五名がその手でくびり殺し、古井戸に投げこんだ大杉栄、その妻伊藤野枝、彼等の甥で六歳の橘宗一の虐殺事件ほど、当時の人々に憤りと驚愕を与えたものはなかった。大杉栄が無政府主義社会主義運動の唱導者としてあまりにも有名な人物であったことと、まだ三十にならない妻と幼い甥が、道づれにされた残酷さが、人々の同情と痛憤をあおったからであった。世にいうこの甘粕事件の犠牲者として伊藤野枝の名を思い出す人は、更にさかのぼって、大杉栄が、情人の神近市子によって刺された葉山「日蔭の茶屋」事件と呼ばれて名高かった情痴傷害事件を想起し、その時の神近市子の嫉妬の対象となったのが、大杉の正妻堀保子ではなく、新しい愛人の、他ならぬ伊藤野枝だったのを思いだす筈である。

わずか数年の間に世を騒がせた二つの血腥い事件に、顔を出す伊藤野枝という女は、もうこれだけでも充分ドラマティックな運命をたどったことが知られる。が、尚その上、彼女が、平塚らいてうの主宰した「青鞜」の同人として、「新しい女」と騒がれた話題の女たちの一人であり、らいてうから「青鞜」を譲り渡され、最後まで「青鞜」と運命を共にし、「青鞜」の幕をひとり閉じるという歴史的な役目を負わされた人物だと知れば、いっそうその生涯の劇的

要素は色濃くなってくる。

その上、アナーキスト大杉栄に走る前は、わが国ダダイストの元祖とされている辻潤の恋妻だったし、戸籍の上では、その前にすでに一度結婚している。子供は十年の間に七人まで生んでいる。わずか二十八年の短い生涯を、平凡な女の何人分もの生命（いのち）の量をあわせたほど、多調多彩に、たっぷりと生きぬいていったことは目ざましい鮮かさである。

私が伊藤野枝の名を識ったのは、明治末年から大正にかけて活躍した女作者田村俊子の生涯を書いた縁による。俊子が関係していた「青鞜」の同人の中に野枝の名をはじめて見出したものの、その後、私は「青鞜」に載せられている彼女の幼稚な詩や、堅い文章で綴られた主観的な感想文や、小説以前の「小説らしきもの」に、何の魅力を感じることもなかった。むしろ、

東の渚

東の磯の離れ岩
その褐色の岩の背に
今日もとまったケエツブロウよ
何故にお前はそのように
かなしい声してお泣きやる

（中略）

ねえケエツブロウや　いっその事に
死んでおしまい！　その岩の上で――
お前が死ねば私も死ぬよ
どうせ死ぬなら　ケエツブロウよ
かなしお前とあの渦巻へ――

というような詩を読んで思わず失笑してしまった。いくら、明治の最後の年に生れた雑誌といっても、この程度の幼稚な詩を堂々と載せねばならないほど、同人たちは才能に恵まれていなかったのかと呆れたものであった。

まして、「青鞜」が結成された時、青鞜社の規約第一条として、

「本社は女流文学の発達を計り、各自天賦の特性を発揮せしめ、他日女流の天才を産むを目的とす」

と謳ってあるのと見比べると、彼女達の無邪気さにいっそう愕かされ苦笑させられるのだった。

そのようにして、素通りしてしまった伊藤野枝に、私は再びめぐりあうことになった。それは田村俊子についで間もなく、岡本かの子について執念深い長い作品を私が書いたためであった。かの子もまた、「青鞜」に俊子より少しおくれ、野枝より少し早く同人として参加していた。一人

ならず二人までも私の心惹かれる秀れた女の作家が、青春の一時期、「青鞜」に席をおいたということから、私はもう一度「青鞜」を見直していた。

その結果、伊藤野枝という「青鞜」で一番年少の同人が、「青鞜」の歴史と共にその青春を生き、誰よりも長く「青鞜」を守り、誰よりも多く「青鞜」から学び、誰よりも深く「青鞜」に失望し、やがて恋と革命のために生命を賭けるべく「青鞜」をスプリングボードとして、決然と過去を絶ちきり、恋人大杉栄の胸に飛びこんでいった火のような野性の情熱と、その強烈な生き方に、強く捕えられてしまったのである。

どうひいき目に見ても、十七歳で「東の渚」のような詩を書いた野枝の文学的才能は大成したとはいえない。後には小説も翻訳も評論も一応ものしているし、文筆で結構稼いでいるけれども、彼女を一人前の作家と呼ぶには最後まであまりにお粗末な作品しか残していない。

私が野枝に惹かれたのは、その文学的才能や、彼女の人間成長の目ざましい過程ではなく、彼女のまきこまれた人生の数奇なドラマそのものであり、そこに登場する人々の、それぞれの個性の人並外れた強烈さであり、その個性の錯綜がかなでる複雑乱調の不協和音の交響楽の魅力であった。その気持は、やがて井手文子氏の労作「青鞜」の中の野枝の項を読み、更に岩崎呉夫氏の詳細綿密な研究による伊藤野枝伝「炎の女」を読むに至っていっそう強められていった。

伊藤野枝の生れた今宿の海辺へ立ち、野枝の歌ったケエツブロウ（海鳥カイツブリの俚言）の声を聞き、野枝の泳いだ博多湾の海の青を眺めることから、私はまず私の胸に棲みついた野枝の俤に近づいてみようと考えた。

ジェット機が板付空港に着いた時、西日本新聞社の記者が迎えてくれていた。私には初対面のその若い人は、車に入るなり、

「マコさんには連絡をとってあります。たぶん、社へ見えて下さる筈です」

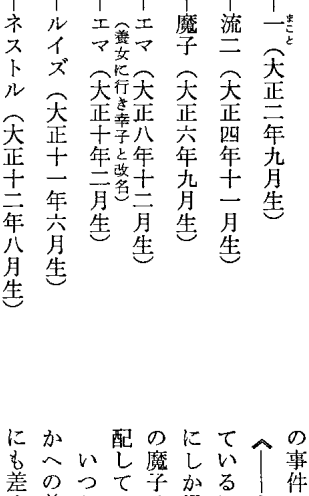
といった。私はとっさに彼のことばの意味がわからなかった。私が博多へ発つ二、三日前、偶然訪ねてくれた旧い新聞ジャーナリストの鬼頭鎮雄氏が、私が何気なくもらした博多行の目的を聞くなり、その日のうちに、西日本新聞に連絡を取ってくれたのだ。

北九州には長く住んだことのある鬼頭氏は即座に、

「博多には野枝の一族の人がまだだいぶ残っていますよ。どうせなら逢ってらっしゃい。大杉との間に出来た娘たちもたしかいる筈ですよ」

といった。その手配も取ってあるからと、出発前には新聞記者らしい素速い配慮の電話をくれてもいた。そのくせ私は、まだ、まさか、そんなに早く、野枝の血縁の人々に逢うなどという心構えが出来ていなかった。

今、聞いたマコさんが、大杉と野枝の間に生れた長女の魔子のことかとようやく気づいたのは、車が博多へむけて、桜の咲く蕾ぶきの家々を後に、五、六分も走りすぎてからであった。野枝は辻潤との間に二人の男の子と、大杉栄との間に四人の女の子と一人の男の子を生んでいる。一目で示せば次のようになる。



こう書き並べてみると、辻潤の子たちの尋常な名前に比べて、大杉栄の子たちの異様な名と休む間もなく妊娠しつづけた野枝の凄じい生命力に驚かされる。

最も奇怪な名をつけられた長女の魔子を大杉は最も溺愛し、その著作の中にも屢々魔子の名があらわれているくらいであった。野枝が出産のため郷里へ子供たちをひきつれて帰る時でも、魔子だけは大杉は手許から離さなかったし、仕事のための旅行にでも邪魔にせず連れていった。

大正十一年の暮、大杉栄は密出国して中国人に化け、密かにベルリンの国際無政府主義大会に参加しようとしたことがあった。ベルリンへゆく前パリのメーデーで演説したため、大杉栄であることが露顕して捕えられた。禁錮三週間の処分を受けパリのラ・サンテの牢獄につながれた。その事件の始終を書いた「日本脱出記」の中にも、

〈――もう今頃は新聞の電報で僕のつかまったことは分っているに違いない。おとなどもはとうとうやったなぐらいにしか思ってもいまいが、子供は、ことに一番上の女の子の魔子は、みんなから話されないでもその様子で覚って心配しているに違いない。

いつか女房の手紙にも、うちにいる村木（源次郎）が誰かへの差入れの本を包んでいると、そばから「パパには何にも差入物を送らないの」とそっと言ったとあった。彼女をだますようにして幾日もそとへ泊らして置いて、その間に僕が行衛不明になってしまったもんだから、彼女はてっきりまた牢だと思っていたのだ。そして、パパは？　と誰

かに聞かれても黙って返事をしないかあるいは何かほかのことを言ってごまかして置いて、特に夜になるとママとだけそっと何気なしのパパのうわさをしていたそうだ。僕はこの魔子に電報を打とうと思った。そしてテーブルに向って、いろいろ簡単な文句を考えては書きつけて見た。が、どうしても安あがりになりそうな電文ができない。そしていろいろ書きつけたものの中から、次のような変なものができあがった。

魔子よ、魔子
パパは今
世界に名高い
パリの牢やラ・サンテに。

だが、魔子よ、心配するな
西洋料理の御馳走たべて
チョコレートなめて
葉巻きスパスパソファの上に。

そしてこの
牢やのお蔭で
喜べ、魔子よ
パパはすぐ帰る。

おみやげどっさり、うんとこしょ
お菓子におべべにキスにキス
踊って待てよ
待てよ、魔子、魔子。

そして僕はその日一日、室の中をぶらぶらしながらこの歌のような文句を大きな声で歌って暮した。そして妙なことには、別にちっとも悲しいことはなかったのだが、そうして歌っていると涙がほろほろと出て来た。声が慄えて、とめどもなく涙が出て来た。——〉と、魔子可愛(いとし)さを手放しで書きつけている子煩悩ぶりである。

彼等の死後二年たって刊行された大杉栄全集の中には、この魔子の写真が一番多く収められている。口絵写真のほとんどが、大正十二年七月十二日、あの最後の日から僅か二カ月前、大杉がパリから帰国した日のスナップなので、神戸まで出迎えた野枝と魔子と大杉が一緒に写っている。大杉が明るい表情の中にも旅疲れを滲ませ、野枝は三年たてつづけの年子のネストルを妊娠、九カ月近い状態のお腹をかかえた生気のない表情をみせている中で、六歳の魔子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひとり、父親ゆずりの大きなつぶらな瞳をいきいきと輝かせ、どの写真でも幸福そのものの聡明そうな顔付で写っている。当時としてはずいぶんハイカラだっただろうおかっぱをモダンな刈りかたにして、しゃれた帽子をかぶり洋服を着せられている。いかにも都会の知的でモダン好みの家庭の子供らしい小粋な感じさえする雰囲気を持っていた。

あの可愛い魔子も今は五十歳に手のとどきかけている筈であった。

西日本新聞社に着くと、もう昼近くなっていた。戦災に焼け残ったこの社屋は、天井がむやみに高く階段の踊り場が広く、階段の栗色に塗った木の手すりがこの上なく頑丈で、いかにも古風な昔の西洋館という感じがする。大正時代がそのまま残っているこの建物の中で、大正の中でも最も劇的な運命の落し子魔子さんに逢うとは、出来すぎた舞台であった。

応接間で、社の人たちと挨拶している時、入口の方に人の気配を感じふりかえると、一人の女がひっそりと入って来たところだった。

小柄な、中年の女の顔が、悪びれず、まっすぐ視線をむけてきた。濃い長い眉と、眉にせまったそこだけ燃えるように輝いているひときわ大きな二重瞼の瞳が顔のすべてのように強い印象で迫ってくる。頬が落ち、短く細い顎に顔の線が集っているので、一瞬ハート型の小ぢんまりした顔のように見えたが、その両掌の中にすっぽりと収ってしまいそうな小さな顔の上に、大きなつぶらな目と長い眉を中心に、写真で見覚えのある丸顔の可憐な幼女の魔子の俤をすっぽりと重ね合すことが出来た。少し歯が出てみえる口元に一番年齢が滲んでいるが、五十近い年とはとても見えない若々しさは、小柄のせいばかりではなさそうだった。一見して、何か翳の匂う顔立だけれど、見合わせてたじろがない強い光りの目の中に、ふっと優しい影がゆらぐと、急に堅い顔の線が和んで、人なつっこさと初々しい羞恥の色が双眸の中にみずみずしくあふれてくる。真黒い豊かな髪と、細い首もとに、きつくあわせた紺ウールの和服と、鼠色の毛足の長い地質の防寒コートが、ようやく私の目に入ってきた。

物おじしない目の光りと、小さな軀全体から気魄の滲みでたあるきびしい雰囲気は、本当のインテリだけのもつ爽やかさだった。

魔子さんの入ってくる一瞬前、私は新聞社の人たちから、「実は、魔子さんは有名なインタビュー嫌いでしてね。記者泣かせなんですよ。御両親のことは一切語りたがらないし、親とは関係ありませんといって、NHKのマイクにもそっぽをむいてしまったという人なんです。取材はちょっ

と……」
と聞いていたばかりであった。私ははじめからその旅で、特に魔子さんから様々訊きだそうという野心もなかったので、ただ目のあたりに、あの可憐な運命の子の五十歳を見ただけで、感動していた。魔子さんは私の一人の姉と同い年であり、ルイズさんは私と同い年の生れであった。いわばこの姉妹と私は、全く同じ世代の辛酸をなめてきたことになる。そう思うと、私は魔子さんに平凡な市井の苦労人の主婦を感じ、急に親近感を覚えてきた。

魔子さんは私の目的を知ると、無造作にうなずいただけで、

「私は、何も覚えていないんですよ。でも、母の叔母がまだ生きていて、少しは話がわかるかもしれません」

といって、自分から、市内に住む代キチさんの処へ案内してくれる。

ならぶと、五尺二寸ほどの私の肩ほどまでしかない、小柄な魔子さんは、

「もう東京の娘に孫があるんですよ。先の主人のところに置いてきた娘なんですけれど、今ではゆききしています。ええ、別れた主人も死にましてね」

と淡々と語ってくれる。

「まあ、親のことでは迷惑ばっかりしかかけられていませんね」

と、ユーモラスに目をくるくるさせるのだ。入学から就職から結婚まで、軍国主義一色に塗りつぶされていた時代に成長した魔子さんが、大杉栄の子だというだけの宿命でどんなに不当な圧迫をうけて育ったか、同じ時代に成長した私には充分に想像がつくようだった。

「たとえば、女学校に入る時ですけれどね。私は、小学校まではここで祖父の許で暮しましたが、女学校は横浜の父方の叔父の家から上ったんです。その時、私は当然県立を受けるつもりでしたけれど、先生が受けさせないんです。どうせ、成績では通っても、大杉の子だというので入れてくれないとわかってるんです。それで香蘭高女に入りましたけれど、一事が万事そうでしたね」

淡々と他人事のように話すだけ、話の重さが聞く方にはこたえてくる。

「父にはずいぶん可愛がられたらしいのですけど、何も覚えていないんですよ。覚えているような気がすることも、あとになって、本を読んだり、人から聞かされたりしたイメージで、出来上っている思い出のような気がするんです。父の本にも書いてありますけど、家の前につめて父を見張っている尾行が、父にまかれていやしないかと思って、表で遊んでいる私に聞くんだそうですよ。パパはいるって聞

くと、うんというし、パパはいないのって聞いても、うんという。それではいったい、いるの、いないのって聞くと、うんうんって二つ返事するんだそうです。魔子ちゃんにはかないませんよって、尾行が父母にこぼしたっていうんです。そんなことをいわれると、何だか、そういう場面が何度もあったような感じがしてくるんですよ。父が私をつれて海岸の宿へよく仕事にいった話など書いてあるのをみると、たしか、父といっしょに海辺を歩いたような記憶もぼんやり浮んでくる。私の思い出なんて、みんなそんな程度なんですよ。妹たちはいっそう小さかったんですから、尚のこと何も覚えてやしませんねえ。ただそうですね。これだけは、不思議に、一つだけはっきり覚えている場面があるんです。何でも父の留守のことで、二階家に住んでいた時でした。玄関にどやどや人のけはいがすると、母が珍しく怖い顔をして、私を二階へ追いあげ、絶対下へ来ちゃあいけないっていうんです。近藤憲二さんが、玄関でしきりに大声で何かわめきあうようにいっている声がするんです。何となく子供心にも怖くなって、二階の踊り場から、そうっと首だけのばして階下をうかがったんですよ。すると階段の一番下の段に、母がどかんと真中に腰をかけていて、横に、灰をいっぱい入れたバケツをひきつけているんです。

その時の母の妙にどかっと坐った恰好と、灰のバケツが、くっきり目の中に残っています。怖かった気持と、母の姿が何となく頼もしかったのと、バケツの灰が子供の目にも異様だったんでしょう。もしふみこまれたら、灰で防ぐつもりだったんですね。

殺された日は、珍しく父が私を置いていきましてね。やっぱり虫が知らせるというのでしょうか。どこへ行くにも私を連れていきたがる父が、その日にかぎって、私をお隣りの内田魯庵さんのところに置いていったんです。

父はとても肉親思いでしたから、鶴見にいる父の弟の一家のことを心配して、早く見舞ってやりたがっていたんです。それで、震災の被害の大きかった叔父一家を、うちへつれて帰るつもりで母と出かけていったんですよ。叔父が病気で寝ていて、甥の宗一だけをひとまずつれて帰って、あの事件になったんです。もし、私があの日いつものようにつれていかれていたら、一緒に殺されていたんですね。

内田魯庵さんが、いつも私が大杉と出かけるのに、後追いもしないので後で考えたら不思議だったといってらっしゃいました。ええ、魯庵さんの家へは、毎日遊びにいっていて、自分の家にいるより長くいたくらいなんです」

私は、そういうふうに自分から話してくれる魔子さんに対して、両親の死んだ日のことも覚えていないかと訊きただす気にはなれなかった。

内田魯庵が「最後の大杉」の中に、あの日の前後の魔子の様子を書きのこしている。

聖書学院の西洋人夫妻かと内田魯庵が見まちがえたような洋服姿で、大杉と野枝はその日出かけていった。その時も魯庵の家で遊んでいた魔子が、

「あ、うちのパパとママよ」

といって、とんで出て、すぐまた引きかえしてきた。魔子は、

「パパとママは鶴見の叔父さんとこへいって、今夜はお泊りかもしれないのですって」

といって、その午後もずっと魯庵のところで遊んでいた。しかしそれっきり、ふたりは帰って来なかったのだ。

大杉と野枝の暗殺がほぼ留守中のものに覚悟されかかっても、魔子は元気に遊んでいた。

ついに大杉たちの無惨な死が発表された朝も、魔子は魯庵の家へやってきた。

《——朝の食卓は大杉夫婦を知る家族の沈黙の中に終った。今日も魔子は遊びに来るかも知れないが「魔子ちゃんがきても魔子ちゃんのパパさんの咄をしてはイケナイよ」と小さい子供を戒めた。何にも解らない小さい子供達も何事か恐ろしい事があったのだという顔をして、黙って点頭いた。

暫らくすると魔子は果して平生の通り裏口から入って来た。家人を見ると直ぐ「パパもママも死んじゃったの。伯父さんとお祖父さんがパパとママのお迎えに行ったから今日は自動車で帰って来るの」と云った。お祖父さんというのは東京より地方へ先きに広がった大杉の変事を遠い故郷の九州で聞いて倉皇上京した野枝さんの伯父さんである。

茶の間へ来て魔子は私の妻を見て復た繰返した。

「伯母さん、パパもママも殺されちゃったの。今日新聞に出ていましょう」

私は子供達に「魔子ちゃんのお父さんの咄をしてはイケナイよ」と固く封じて不便な魔子の小さな心を少しでも傷めまいとしたが、怜悧な魔子は何も彼も承知していた。が、物の弁えも十分で無い七歳（註・数え年）の子である。父や母の悲惨な運命を知りつつもイツモの通り無邪気に遊んでいた。同い年の私の子供は魔子を不便がったと見えて、大切にしていた姉様や千代紙を残らず魔子に与えて了った

——》

私は魔子という変った名を嫌いかと笑いながら訊いた。魔子さんは、今は真子と改名している。エマは笑子、ルイズは留意子となっているらしい。

「さあ、やっぱり、今でも東京の昔の父母の知人たちは、私をみると魔子としかいいませんしね。嫌いな名じゃないですね」

と、さばさばした笑顔をみせていた。
車の中でそんな話をしているうちに、千代町の代恒彦氏のお宅へついていた。代キチさんは、野枝の父与吉の末の妹で、代準介に嫁している。野枝を小学校の時代から引きとり、面倒をみているし、東京時代も野枝を自分の家から女学校へ通わせた。野枝の成長期にはむしろ両親よりも縁の深かった人物に当る。今はお孫さんの時代になっている。
たまたま、今日はひい孫の入学試験とかで家中留守の中で、奥の部屋にキチさんはひっそり床についていた。風邪気味で寝ているのだというキチさんは、色の白い皮膚のきれいな小ざっぱりとした老人だった。ふだんはめったに寝こむことのないほど元気な人だというキチさんは、病床でも、白髪のまだ櫛の通る量の髪をきちんと小さな髷になでつけまとめていた。
面長の端正な目鼻立に、今でも鼻筋がすっきりと通り、やや目尻の下った目にいきいきと表情が多い。なめしたような白い頬に皺もしみもほとんど目だたなく、夜具の衿元に出した可愛らしいきゃしゃな手に、どこよりも若さとなまめきさえ残っていて、はっとさせられた。
きれいなお年寄だと感心する私の横で、魔子さんが笑いながら、キチさんには聞えていないという調子で話す。
「とてもお婆ちゃんはおしゃれなんですよ。今でも、お酒の燗ざましや玉子の白味は少しでもあれば顔や手にすりこんでるんですって、孫の嫁がとても若い者も敵わないって笑ってるんです。髪だって、毎日、結わないと気がすまないんですよ」
私たちの話す顔をにこにこしながら、見上げていて、キチさんは勝手に所々でひとりうなずいている。それでもちょっと声を張ればこっちのいう事も聞きとれて、返事はみんなことば尻まではっきりとしており、愕くべき記憶力と頭の冴えだった。
《ほう、それはまあ、さようでございますか。わざわざ東京からいらっしゃったとですと。それはまあ。はいもう、このようにぼけてしまいまして、ちかごろ、すっかり役たたずでございます。なんのためにこうして生きておりますことやらなあ。はあ、年でございますか、さようでございます。いくつになっておりますることやら、なにしろもう、ながあいことこうして生きておりまして、役にもたたず、どうしたものかと思いますよ。それとて、まだおむかえがまいりませずなあ。明治九年のうまれでございますから、かれこれ九十にもなっとりましょうか。さあ、百にもちこうなっとりましょうか。ながあいこと、かぞえたこともございません。

野枝のことでございますか。もうとんと忘れてしまいまして。何ごとも、ぼうっとかすんで忘れてしまいまして。こうしてうつらうつら思いだしますことと申しますのは、こどもの時のことがいちばん多いのはどういうわけでございましょう。それから、うれしいにつけ、かなしいにつけ、骨にも身にもしみわたったきつい思い出というものがわすれられませんようでございます。

野枝のことでございますか。あの子は長崎にわたくしどもがおりました時、家が貧しゅう子だくさんでありましたのでうちへまいりました。気のつよい、きかん気のごついおなごでございましたが、泣き虫でもありました。わたくしのつれあいの代準介は、長崎で三菱造船所に、材木などいれておりました。後に東京へまいりましたが、東京時代はさあ、いったい何をして暮しておりましたのやら、何やらもうすっかり忘れてしまいました。はい、頭山満翁に可愛がられておったようで、玄洋社とかのことをしてでもおったでございましょうか。はあ、さようで。わたくしは代の後ぞえにまいりましたので娘の千代子は腹をいためておりません。野枝はわたくしの身内でございますもの、野枝のつらがるがごと、ある筈のありましょうことか。

野枝の母おやでございますか。おうめさんと申しまして、それはようでけたお人でありました。どこと申して申しぶんのないだれからみてもやさあしい、ようでけたけっこうな人でありました。わたくしどもの家は、今宿の「よろずや」と申しまして、まあふるい家がらでございます。昔は廻船業でずいぶんとさかえたそうにございます。わたくしの子供のころはけっこうなくらしをしておりました。おちぶれたのは野枝の生れる頃でございましたか。あれの父の与吉が遊芸ばかりが好きで、家もつぶれるようになっておりました。はあ野枝のてて親もよか男でございましたよ。大体によろずやの顔だちというものが、あのかいわいでいいつたえられておりまして、よろずや眉、よろずや目というのがございましてなあ。わたくしなどさっぱりでございますが、きょうだいみんなきりょうよしで評判をとっておりました。この魔子なども、東京からつれてかえって、今津あたりへ遊びにいっても今津の村人から一目で、ああ今宿のよろずやの孫娘だろうと当てられたものでございます。天然によろずや眉と目を持って生れておりますものなあ。野枝でございますか。ええ、ええ、きれいでございましたとも。はっきりした顔だちのよか女でございました。本を読むのが大好きで、掃除とか裁縫とか女らしいことは好きではありませんようにございました。それでも女のつとめだからと申して、千代子と交替でむりにやらせるようにしたものでございます。泳ぎでございますか。はあそれはあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com